

平成三十一年

梅咲く

一月一日 高曇り 二日 快晴

薄青の紅へと変わりて初の富士

蘭ほころぶ二日の午後のガラス越し

初夢は矩越えて翔べ古稀の空

年賀状雑感

三年も空きたる賀状令室名

親しき友賀状仕舞の文字のあり

一月八日 神奈川工科大講師  
厚木にて昼酒でささやかに打ち上げ

昼酒の暖簾の外は寒の風

おしめりに梅の香低く漂へり

二月二十六日大倉山梅園

古木在りし跡地に家族梅見かな

観梅や惹かれる花もそれぞれに

整ひし梅園にゐて野趣恋ひし

園児らの群がる池や蝌蚪の難

冴返る日の家苞の卵焼

薄闇の何やら凄し猫の恋

菜種梅雨ピカソ絵柄の傘さして

鶴見川大曲付近満潮

満ち潮に光揺蕩ふ春の川

千賀子さんから夏蜜柑の荷

伊豆よりの夏柑ずしり届きけり

三月十二日 房総へ一泊

オーシャンフロントの部屋

白波の立つ日もありて春の海

花畑

菜の花の沖は白波飛砂の浜

フランスの五月の野は血の色

くれなるのポピーに異土の野を思ひ

昼、花の天ぷら

天ぷらの衣を透けて金盞花

帰りの館山道路

渋滞中海見ゆる先霞む富士

三月二十二日から裾野

雪柳枝の向こふも庭いぢり

露台白し斑雪掃く竹箒

東ねたる黄のフリージア帰路の旅

桜ほころぶも低温続きで進展が遅い

高階の眺め花色日々に増え

思いの儘実生桜は河川敷

花筏真ん中割りて真鯉の背

四月一日 新年号は「令和」

陽の光令和に続く花の色

葉脈の線も際立つ若葉かな

神奈川大学

キャンパスを行く白き腕夏兆す

四月二十三日 入部五十年同期会  
千葉大学西千葉キャンパス訪問

キャンパスの大樹の若葉今盛ん

半世紀大樹若葉の語りをり

学食のカレー変貌若葉風

女子学生の服装が神奈川大学より地味

キャンパスの娘らは地味四月今

花水木盛ん

さっちゃんとか歌ふ童女や花水木

印相を解きて見え切る花水木

## 令和元年

五月一日

薄日射し令和薫風吹き抜けり

山水の白を緑に若葉風

五月十三日 横浜

若葉雨古き館の玻璃の窓

港が見える丘公園

熟女のみ写真教室薔薇の園

山下公園

薔薇の香や女子高生の声の満ち

薔薇園や修学旅行の子らがゐて

五月二十六日 裾野

期せずしてさつきの盛り陋屋かな

冷奴という食い物

冷奴まずは二つに割りにけり

冷奴辛子じゃう油の朝餉かな

大倉山

桑の実を辺り見まわしそつと食ぶ

桑の実を摘む白シャツに濃き紫斑

裾野山荘  
未容柳

おほでまりそよとも揺れず空重し

梅雨の闇黄の花蕊の仄かにて

回想三句

六月二十五日 地震

故郷

露を剥く祖母と母の手の動き

梅雨晴れやもの皆光り影の濃く

母 伊豆の菖蒲園

七夕は雨

菖蒲田の記念撮影曇む傘

スイスの朝を思う

笹の香の漂ひ雨の星祭り

乳牛（ちちうし）の霧に臥（が）したる夜明けかな

七夕や地下街笹の香外は雨

旧友と合奏を始める

典子、リリアンさんを横浜ご案内

猛暑衝き楽器携へ友の来し

異人館異国の人と梅雨晴れ間

オリンピックセンターの庭

梅雨寒や弓引き絞る緋の襷

油照一雨後の濛気かな

マドンナの五月に嫁ぎしを母上から聞く

空蟬や隣家の娘嫁すを聞く

草露で空想

故郷の道露指で掬い取り

慣れし道敢えて露に濡れにけり

力芝穂に露満ちて道を塞(せ)く

もう法師蟬

おしまいの二言三言法師蟬

蟻螂の構へる斧に隙は無し

裾野山荘

朝顔の庭木に這ひて空家かな

智史、真美、海翔、海果

バーベキュー日除けの下に集まりぬ

海ちゃんの泣き声 What a wonderful world

素晴らしき世界ベビーはハンモック

珍しくも兼題を出す栄誉『天高し』

天高し羊は並び南天へ

天高し夜の漆黒の予感あり

九月二十二日 ゆり

秋海棠零れて母の九回忌

九月二十三日 裾野山荘

台風十七号 太平洋に行く

山の端に日脚刹那に野分余波

九月二十七日日から数日間

一株植えの朝顔がすごい勢いで咲く

朝顔の白だけ十輪並び咲き

今年は彼岸花が遅い

二三日も見ぬ間の緋色彼岸花

植え込みの誰が心根か彼岸花

十月二日 銀座

天高し騎馬像飾れる摩天楼

十月九日 東京文学散歩 快晴

水辺の公園

それぞれにベンチで昼餉秋日差し

細川邸

池端のはぜは斑に秋日和

十月十五日十六日西郷村甲子温泉

台風十九号で大洪水だった阿武隈川の源流

西郷村東高原

友の居し景色の中へ秋の風

トンネルを抜ければ時雨会津国

甲子温泉大黒屋

露天風呂苔むす石にお湯をはね

朝の日に紅葉の影の蠢けり

十一月四日 仙石原高原吟行

芒原穂先は西へ湖の方

遠山に日の射し秋は静まれり

枯れすすき若き声満ち華やぎぬ

裾野山荘に泊まる

秋刀魚焼く七輪の様ちと凄し

十一月二十一日 宇和島蜜柑届く

薄皮の小玉の蜜柑剥きにけり

十一月二十一日 朝顔赤裂咲く、これが仕舞

霜月の朝顔三日凜として

十一月二十五日 濃い朝霧 太尾新道

朝霧の薄れて舗道に赤黄の斑

赤は赤黄は黄の下へ降る落葉

セントアンドリュースの帽子

朝未だき異国で求めし冬帽子

東京のバス

ステップに落葉ちりばめバスの来ぬ

バスは行く東京の色銀杏の黄

落ちてから存在感のある葉っぱ

鈴懸の落葉の舞ひし音微か

友人、昔の上司、同僚、相次いで長逝の年

知己いくたり鬼籍に入りし年暮るる